



生死出離の一一道

親鸞も、また蓮如も、生涯かけて求め続けた道。「仏教」・「仏道」を、この人たちは煩惱具足の凡夫という主体的立場から、あたかも泥沼からもがき這い出るよう求め続けた。釈迦の説いた「眞実」(法)に導かれて。

仏の教えとは、縁起・因縁生起。

ものは、単独独立にあるものはない。無数無量の助縁・条件の支えのなかではじめて存在する。生きとし生けるものの「いのち」も「衆生」(衆多因縁生)と見る。蓮如は「仏法は無我」にて「候」とくりかえし教えた。

「法を見るものは縁起を見る」。縁起の世界に身も心もゆだねて素直に生きることこそが仏教の「覚悟」(さとり)である。この「如是我聞」(縁起といふ)りょうに随順して、そのように生きる世界こそ「生死出すべき道」「寂滅為樂」である。

とはいものの現実の世界、現実の私は、「我」の世界からぬけだせない。「有為・有漏」の世界のなかにいる。無明・我見・我慢・我愛(わたしの・わたしを・わたしに・わたしと・(私)の鬼)のフィルターを通してしか五感(眼・耳・鼻・舌・身・意)も働かない。すべて「我の世界」としてはたらいて、「現行して」いる。そのような世界に生きている。「末那識」(マナス)。思量・分別を本性とする自他分別・比較・対立・

競争・差別そして戦争の世界を現出しているのがほかならぬ私の生きざまではないか。それこそ、「われひとりよし」として、「有為の奥山」、「薦・茨の道に踏み惑う」このわたし。親鸞が「無明煩惱、われらが身にみちみちて、欲も多く、怒り、腹立ち、そねみ、ねたむ心多く暇なくして臨終の一念にいたるまで止まらず消えず絶えず」と悲嘆するわれらの世界である。

重々無尽の縁起の中にあるにもかかわらず、依怙地に「わが一家一族の門地」を誇り、差別社会をつくっているわが日本民族の宿弊が世界戦争の引き金になつたことを反省すべきである。

法然も親鸞も、そして蓮如も、「もの知り顔」「わがもの顔」「我が身あり顔」「獨覺心」を「これ聖人の御罰なり」と嫌つたし、特に「法師づら」「学匠ざた」「聖教よみの聖教しらず」と唾棄している。

わたしの教養・私の知識・私の思考の及ぶ範囲を知ろう。所詮、「井の中の蛙」ではないか。無我。我見・我愛を超えよう。「浅き夢みじ、醉ひもせず」。これこそ「無我」の教え。「生死出離の一道」なのである。

思議の世界で見る夢は、自己陶酔。自己満足でしかない。

次に、不思議の世界。思議の世界で行き詰ったとき人間は、靈界・冥土。などの虚構の世界を仮想してそこへ逃避する。虚構は虚構であって、だれもが救われる境界ではない。

不可思議の世界。「不可」は禁止。思議分別を厳しく排除した世界である。「清浄の土」と呼ばれてきた。「生死出すべき道」がそれである。

その世界に足を踏みいれるには。

これを求め続けたのが法然・親鸞・蓮如であった。

その手掛かりとなるのが善導の『觀經義疏』にある七深心觀。「就人立信」「就行立信」。

人に就いて信心を確立するとは。釈迦や諸仏のおしえにしたがつてという意味だが、そこで言う「人」を親鸞は「よき人法然」と見た。

「よき人の仰せをこうむりて信するほかに別の子細なきなり」「たとい法然聖人にすかされまいさせて念佛して地獄に墮ちたりとも、さらに後悔すべからず候」

親鸞の生涯は徹頭徹尾法然の淨土の眞実を顯彰するにあつた。

その法然の説いた法は、それは《選択本願念佛のおしえ》(南無阿弥陀仏。往生の業は、念佛をもつて本と為す)。南無阿弥陀仏の御名を称える事。

それは、聖道門をさしあいで淨土の教えへ。淨土門のなかでも雑多な行のうち正行、五つの正行のなかでも「生死を超えてまさしく如來慈悲の海に一味同朋となる現生生定聚に回入」する業。これしかない。なぜか。それは如來さまのご本願。(凡夫のわたしを救う道と、選び選びとられた道であるからだ)。この、不可思議な称名念佛こそ生死出すべき道。

つぎの蓮如のことばを聞こう

「仏法の義をはよくよく人に問え。物をば人によく問い合わせの由し仰せられ候。誰に問い合わせの由し伺い申しければ、仏法にだにもあらば上下をいわず問うべし。仏法は知りそもなきものが知るぞと仰せられ候。」

師はどこにでもいる。師を求める姿勢こそ大切ではなかろうか。

「真実信心の称名は、弥陀回向の法なれば、不回向と名付けてぞ、自力の称念こそ大らわる」(和讃)と言うは、弥陀のかたよりのむこころも、とうとや有りがたやと念佛申すこころも、みな与えたもうゆえに、とやせんかくやせんと計らふて念佛申すは、自力なれば嫌うなりと

歎異抄の「ただ念佛して弥陀にたすけられまいらずべしと、よき人の仰せを蒙りて、信するほかに別の子細なきなり」(老いた身の悲嘆のなかで)

十一月(霜月)のこよみ

一日(土) 森戸 義則氏宅法事

二日(日) 高福寺報恩講

三日(月) 光顕寺報恩講

四日(火) 出石お城祭り

五日(水) 朗誦Vあすなろ(録音日)

六日(木) 正福寺報恩講

七日(金) 正福寺報恩講

八日(土) 正福寺報恩講

九日(日) 本覚寺報恩講

十日(月) 坂本 智氏宅法事

十一日(火) 中川フジ工様忌明法事

十四日(金) 西方寺報恩講

十五日(土) 西方寺報恩講

十六日(日) 福成寺報恩講

十七日(月) 平野 徳由様一周忌

二十二日(土) 報恩講(7時半)

二十三日(日) 正法寺懇講

二十四日(月) 正法寺懇講

二十五日(火) 正法寺報恩講

二十六日(水) 正法寺報恩講

二十七日(木) 佐田・奥栗尾報恩講

二十八日(金) 口栗尾報恩講

二十九日(土) 石田久美子様一周忌

三十日(日) 石田 和義氏宅法事

「連研」反省会

「死」ということ

六十七歳・男子

私の従兄弟。二歳年上で、69だった彼。

わたしと違つて秀才の努力家で、中学からでは都会の一流高校に進み、そして神戸の方の理工科系大学で最後は助教授をしておりました。その彼が、一昨年末、突然、全身の神経が麻痺していく病に冒され倒れてしましました。大学病院では余命いくばくもないとの診断宣告されたのだそうです。

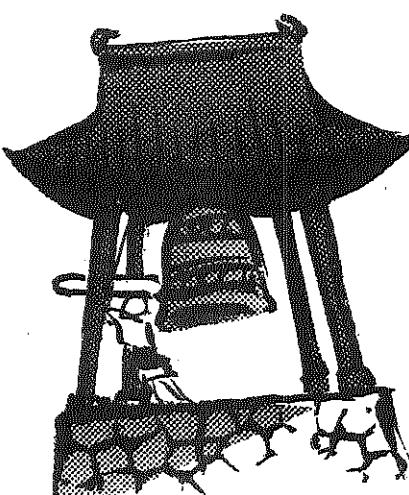
毎月、見舞いに行つたのですが、行く度ごとに病状は悪化。やがて声も出ず、筆談も出来ず、目で操作するパソコンボーラーのようなものをつかって気持ちを表現していました。あの月の始め見舞った時、その彼がおかた2時間もかけて必死に私に伝えてくれたこと。

中川	葬儀
フジ工	墓坂
十月十三日	坪口
二二吉田力	様
六十四歳	

わたしはわたしのチッポケな、あるいは得手勝手な判断で、ここで私の死なんて独断で幕引はしたくない。人間の「いのち」は肉体的な停止で、それだけで終わるものなのだろうか。

去年死んだわが家の「たけし」いう犬に学びたい。「たけし」というあの年老いた犬。半年ほどのあいだに目がみえなくなり、足がもろくなり、食欲が衰え、苦しみもがく事もあったが、そんな苦しみを全部その身に受け止めて、そして最後の一週間は静かに静かに眠るように消えていった。

苦しむかもしれない、狂うかもしれない。しかしどうかそれが「いのち」の真実だと見ないでほしい。人の目にはそらしないと思う。わたしはある「たけし」という犬のようにからだの痛みも心の苦痛も恥も外聞も、みんな自分に受け入れて、なにかもっとおおきな本当のいのちの中に消え入りたい。



報恩講ご案内

十一月一~十一日

【おとぎ】

夜

六時半

ご伝鈔

七時半 正信偈

ご法話

西宗寺前住

内田 宏園 先生

十一月一~十一日

午前

十時

阿弥陀經

ご法話 内田 宏園 先生

【おとぎ】

☆両日いづれかのおよとぎにおつき下さい
☆事前にご希望をお知らせください

「蛸」には沢山あしがある。蛸を捕まえるとなるとあっちの足、こっちの足、よってたかってひっぱって捕まる。

空にあげる凧は、通常一本の凧糸であやつるのだから、凧からは引く手あまたという意味合いは出てきそうはない。



私は、やがて体の機能が段々なくなつて、心臓も停止し、脳死になつて死んで行くだろう。何処が私の死か。どこで人この病気になつてからズーとそのことを考えている。

しかし、姿かたちはどうかもしないが、なんでそれが「引く手あまた」にながるのかやはり不審。どなたか本当のことを教えて下さい。(子供会でこんな質問にあって困つています)